

風化させない

71年目のヒロシマ

④

広島に原爆が投下された日に当たる8月6日と前日の5日の夜、原爆ドーム（広島市）近くの橋のたもとで「小さな祈りの影絵展」が開かれていた。高さ2メートル、幅4メートルほどの大きな黒い箱の側面に、風景や人が描かれた影絵が約30枚並べられ、箱の中からもさされた光によって、浮かび上がっていた。

平和活動する若者

記憶つなげる思い強く

は2005年。映画の美術監督と影絵作家が、被爆60年を機に、戦前に友人と山菜を採りて出掛ける若き日のおはあさん、原爆ドームに散歩に来た祖父と孫の姿など「身近な幸せ」が表現された。当年を最後に活動の休止

を決める。立ち上がったのが、影絵展に関わっていた中高生らだった。「もう一度あの場に立ちたい」と、自分たちが中心になって活動を引き継いだ。個人や企業から協賛金を募り運営費

たり前と思いがちな日常を通して、平和の尊さを伝える趣向だ。学生たちの説明に耳を傾けていた宮原聡子の代表を務める森長蓉さん(56)「福岡県久留米市、中学教諭」は若

部活仲間に誘われ活動に参加した。平和への強い関心があったわけではないが、関わるうちに「どうせなら、いい作品を、人の心に届くものを作りたい」と考えるようになった。さらに、思いを強くさせてくれる出来事があった。

3年前、被爆者の女性が見に来てくれた。静かに絵を見ていた女性



影絵について説明する「影絵ユースワークショップ」代表の森長さん＝広島市中区

性が、森長さんに「新世代。森長さんは「やうて来た」と話した。原爆のことを考えないように、この時期はいつも旅行に出ている」と続けた。「私たちが踏みとどまっていけない。これまでつなげてきた記憶を、次の世代につないでいかなければならない」と力を込めた。

平和を求める意識が希薄だといわれる若い（鳴門支局・大城咲）